

「厳冬の時が過ぎて」

I、事件の四年後に

一、

どちらかというところ、自分は友達作りが苦手な方だと深雪（みゆき）は思う。自分の気持ちを高揚させ、この人を友達にしてみようと努力して近づかないと、友達と呼ぶことのできる誰かができない、そんな気がする。そして、残念なことに、社会人になってから結婚して退職する十一年間ほどは、友達になってほしいという雰囲気強く漂わせながら、深雪に近づいてくる人は居なかった。でも、中（ちゅん）さんは違った。あいつは、あのおやじは、そんな雰囲気は一切身にまとうこともなく、深雪の中の友情という領域に無遠慮に入り込んできた。

佐久間中（さくまあたる）、日読新聞社北海道支社の同僚たちは、「ちゅんさん」と呼んでいた。深雪のかつての上司。背の低い、腹の出た、髪の毛も残念なほど薄く、お酒が好きで麻雀が好きな初老の独身男。感じる雰囲気は、要領悪く斜に構えてしまった普通のおじさん。ただそれだけの存在、当時はそう思うだけだった。

深雪にとつてのそんな印象を大きく変えたのは、三年半ほど前に、中さんの退職祝でお酒を飲んだ時だ。中さんが日読新聞社を退職し、子会社に転籍になるという日、日読新聞社の同僚数人とささやかな退職祝を開いた。一次会が終り、何の因果か二次会では中さんと二人。ススキノのウイスキーバーに連れて行かれ、中さんは嬉しそうに、丸い氷の入ったロックを飲んでいた。きつと、私と二人で飲むのが嬉しかった。深雪はそう思っている。

日読新聞社の関連会社へ転籍になるというのだが、中さんの自慢気な話しぶりでは、顧問的な立場で週二、三日、席についていればいいんだ、そういうことらしい。

「中（ちゅん）さん、これからどうするんですか？ 仕事も暇で家に帰っても一人だと寂しいでしょ」

私みたいな面倒な部下がいた昔が懐かしくなりますよ。少しからかい気味にそう続けようと思った時、中さんのグラスの氷がカラン、乾いた音を立てた。

「あの時、彼女は、女房は病院のベッドの上でこう言ったんだ」

中さんは二十代半ばで結婚したが、結婚して数年後に奥さんが亡くなったと聞いていた。それ以降、中さんは再婚していない。

「へねえ、私のこと、愛しているって言ってな。へああ、愛してるよ」って答えた

よ。〈私のこと、大好きなんでしょ〉、彼女は、そう言ったんだよ。〈ああ、大好きだよ〉、そう答えた。そうしたら、彼女は、枯れたように細くなった両腕を俺の首に廻して、俺の耳元でささやいた。〈私、あなたが大好き〉。それから間もなくだったよ、意識が混濁したのは。逝っちまったのは、それから三日後だった。彼女は二十八、俺は三十のときだったな」

私は、目頭が潤んでくるのを感じて、声を立て直して聞いた。

「奥さんはガンだったって聞きましたが」

「ああ、乳ガンが他にも転移していたな」

「寂しかったですね。亡くなられて」

そう言った私を中さんはじっと見つめた。

「うん、でもな、ミー。みんな誰かに好かれたいんだ。愛されたい。恋人でも、連れ合いでも、いや、友達でもいい。一人しかいなくてもいい。そんな人が居れば生きられる。そして、俺には彼女が居る」

これからも中さんと繋がっていたい。そんな気持ちにさせる言葉だった。